The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	語彙借用に見るモンゴル語とチュルク語の言語接触 : 特にカザフ語及びトゥヴァ語との比較を中心として
Author(s)	中嶋, 善輝
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/51188
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

氏　　名	中嶋　善輝
本籍（国籍）	
学位の種類	博士（言語文化学）
学位記番号	甲 第　６８　号
学位授与年月日	平成１８年９月２７日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当　課程博士
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻
学位論文題目	語彙借用に見るモンゴル語とチュルク語の言語接触 －　特にカザフ語及びトゥヴァ語との比較を中心として　－
論文審査委員	主　査　　教　授　　橋　本　　勝 副　査　　教　授　　藪　　司　郎 副　査　　教　授　　勝　田　　茂 副　査　　教　授　　岸　田　文　隆 副　査　京都産業大学　庄垣内　正　弘

論文の内容要旨

本稿は，アルタイ諸語に一括されるモンゴル語とチュルク語の関係を，言語接触の観点から考察し，［中嶋善輝 2004a, b, 2005］で提示したチュルク語由来の語彙分類の幾つかの方法および，この度新たに加えた若干の観点から，歴史的過程の中で行なわれた借用の有様と，両語族の言語的類似性の発展の問題を明らかにしようと試みたものである．そして，アルタイ論者であった N. Poppe は，著書 *Introduction to Altaic Linguistics*［1965］で，It would not be an exaggeration to say that about twenty-five per cent of the Mongolian vocabulary is of Turkic origin（モンゴル語語彙の 25% ほどはチュルク語由来であると言っても過言ではなかろう）［同：159］と述べたが，この点に関し C. Bawden 著 *Mongolian-English Dictionary*［1997］を現代モンゴル語の資料体として選び，その中におけるチュルク系語彙の割合を調査し，先の N. Poppe の発言の信憑性を確認しようと努めたものである．

一連の分析を行なうに当たり，モンゴル語との比較検討の主な対象言語として選んだチュルク語は，カザフ語とトゥヴァ語である．それは次のような理由からである．

まず，カザフ語はモンゴル国の隣のカザフスタンを中心に暮らす 1000 万ほどの人口を有すカザフ人の用いてきた，語頭に ǰ- を有すチュルク語である．語頭に ǰ- を有すチュルク語は，語頭に y- を有すチュルク語に対する別の方言を意味する．チュルク語において，この語頭に ǰ- を有すか y- を有すかは非常に重要な問題で，本来の（外来語の影響の少ない）チュルク語にとって，語頭に子音 ǰ- が立つ体系であれば，その言語は語頭に y- は立つことができず，そして語頭に y- が立つ体系であれば，語頭に ǰ- がくることはない，という共起制限があるからである［中嶋 2004a：121-123］．「モンゴル語の語頭の ǰ- は，チュルク語の語頭の y- と音対応する」との漠然とした考え方は従来よく知られてきた．しかし，カザフ語とモンゴル語の音韻上の密接な関係は，語頭 ǰ- が 1 対 1 で対応するものばかりではない．このことは，すでに 13 世紀（1240 年頃）にモンゴル語で著された『元朝秘史』(NT.) に記されたチュルク系借用語中にも確認できる．① NT.bawurči《料理人》: Kzk.bawïr《肝臓》(: AT.baγïr / NUi.beγir / Trkm.bagïr 肝臓)，② NT.tegüs《完全な》: Kzk.tüges=《終える》（: NUig.tügäš= 清算する），③ NT.muŋtani=《自ら苦しむ》: Kzk.muŋdan=《悲しむ》（: NUig.muŋlan= 悲嘆する）などの例

が端的にそのことを示している．① の例からは，古代チュルク語（AT.）-aγï- が，チャガタイ語派の新ウイグル語やオグズ語派のトゥルクメン語で口蓋音 / γ / ～ / g / として保存されているところ，カザフ語（キプチャク語派）は半母音 / w / に発展させている．まずここから NT.bawurči の下線部は，キプチャク語派からの借用であった可能性が高いことが分かる．② は，チュルク語で本来の -š(-)（語中，語末の）が / š / のまま保存されるか / s / に発展するかの方言的な違いである．NT.tegüs は，Mo.tegüs《完全な》/ tegüs=《終わる》と同根で，AT.tükä=《完成する》の相互・共同形接尾辞 =š= の付加された *tükäš= とその名詞形 *tükäš に由来するとみられるが，Trk. / š / → / s / は，カザフ語をはじめとする一部のチュルク語（カラカルパク語やノガイ語（共にキプチャク語派），ヤクート語，西部裕固語）の特徴である．キプチャク語派でもキルギス語やタタール語などは š 方言であり，また，チャガタイ語派やオグズ語派のチュルク諸語も軒並み š 方言である．③ は，-ŋ に付加された歯茎側面音 / l / が歯茎破裂音 / t / ～ / d / に異化するか否かの音韻現象である．この音現象は，キプチャク語派でもカザフ語とキルギス語にのみ見られるもので，カザフ語に極めて近いカラカルパク語（cf.Kkp.muŋlan= 悲しむ）には見られない．以上のように，j- 系チュルク語方言で，① ～ ③ の音韻特徴を全て一言語の体系として具有しているのは，事実上，カザフ語のみであったことが分かる．このような理由から，カザフ語は古くから他のチュルク語以上にモンゴル語と密接な関係にあったことは明らかで，モンゴル語とチュルク語との関係を考える際には，欠くことのできない有力な言語と考えられる．

トゥヴァ語は，モンゴル国の西北に位置するトゥヴァ共和国を中心に，20 万程の話者人口を有するチュルク語である．モンゴルの影響でチベット仏教を信仰するため，モンゴル語から 2,200 語以上の借用語を取り入れた［В. И. Рассадин 1980 : 58］．モンゴル語は歴史的に，チュルク語から多くの語彙を借用したと考えられるが，本稿がここで特にトゥヴァ語を考察の対象に選んだのは，モンゴル語が逆にチュルク語に大きな影響力を有した場合，この接触によってそのチュルク語にはどのようなモンゴル側からの作用が反映されるのかを，観察し得ると考えたからである．

さて，本稿の第 1 部は，第 2 部で行なう考察に当たっての本稿の基盤となる考え方を論じた．その 1. ではまず，モンゴル語学におけるチュルク系借用語の研究状況の現状とその遅れを指摘した．そして，2. では，筆者が上記の論考内ですでに指摘してきた語頭子音目録の違いを根拠に，モンゴル語とチュルク語の「共通祖語」という概念は考慮せず考察を進めることを述べ，また，プロト・チュルク語の再構法と，チュルク系借用語彙の判別法などを中心に論じた．モンゴル語の不完全チュルキズムと完全チュルキズムをめぐる問題は，［中嶋 2004b］などで筆者はこれまでに提唱してきているが，その 1 例が「本来のモンゴル語は，語末に -g / -γ を持たない体系であった」という仮説である．本要旨でも以下に示した若干例に関わるので先ずは言及しておく．またこの現象は，第 2 部で行なう借用語・借用時期判別などでも頻出する欠くことのできない，筆者独自の主張である．2-5. と関連して 2-4. では，「同一調音点を持つ子音は，有声無声の対立を有さない」ことを言及した．本稿がモンゴル語と接触していたプロト・チュルク語（PT.）に，A と B の 2 つの段階があったものと推定する根拠は，古代チュルク語（[k- / q-]，[t-]，[y-]）やカザフ語（[k- / q-]，[t-]，[ǰ-]）などのチュルク固有語の，特に語頭子音の体系が，モンゴル語のそれとは異なり［g- / γ- : k- / q-］，［d- : t-］，［y- : ǰ-］といった有声無声の対立を有さない言語であると考えられるからである．

2-5., 2-6. では，さらにこの点に関して，もう一段踏み込んで行なった提案が盛り込まれている．

それは，この現象が単に語頭子音ばかりではなく，PT. 系借用語の語中で，有声音系か無声音系に分かれるという現象がみられるという指摘である．次の例を見てみたい．

A
① (Mo.g- : Trk.k-) Mo.gölüge 犬等の子 : Turk.köşek ラクダの子
② (Mo.d- : Trk.t-) Mo.deligüü(n) 脾臓 : AT.talaq 脾臓
③ (Mo.d- : Trk.y-) Mo.dalda 秘密の : AT.yašït 秘密の

B
①' (Mo.k- : Trk.k-) Mo.köke 青い : AT.kök 青い
②' (Mo.t- : Trk.t-) Mo.čike (←*tik) 真っ直ぐな : Kzk.tik 真っ直ぐな
③' (Mo.ǰ- : Trk.y-) Mo.ǰirüke(n) 心臓 : AT.yüräk (~AT.ǰüräk) 心臓

上の A は，モンゴル語の語頭は有声音系列のもので PT.A 系借用語，B のそれは無声音系列で PT.B 系借用語と考えられる．A ③ 以外は，チュルク語の対応語は無声音 -k / -q 終わりの語で，モンゴル語形は不完全チュルキズムのために，A，B 共に母音の付加がみられる．ところが，A と B のさらに異なる点は，語頭が有声音系列である A では Mo.gölüge / deligüü(n) / dalda のように語中でも / g / や / d / のような有声子音が対応するのに対し，B では Mo.köke / čike / ǰirüke(n) のように語中では無声子音が対応する傾向が見られるのである．とすると，無声子音 s- で始まるような AT.sök=《跪く》に対するダブレット Mo.sögüd= (сөгөд=)《跪く》と Mo.sökü̈re= (сөхрө=)《跪く》や，Kzk.sabaq《茎，柄》に対するダブレット Mo.sibaγa (шавга)《くじの棒》と Mo.sabqa (сабх)《棒切れ》のそれぞれ前者 Mo.sögüd= と Mo.sibaγa は，PT.A 時代の借用であった可能性が高いものであることが推測される．本稿では語頭子音からではなく，語中子音の有声・無声の異なりや，不完全チュルキズムなどの特徴から判別される PT. 系の借用語には，PT.(A)，PT.(B) という，括弧付きの借用期判別の目安を新たに提案している．

第 1 部の 3 では，モンゴル語とトゥヴァ語の言語接触について考察を行なった．トゥヴァ語にモンゴル語からの借用語が多いことは先に述べたが，特に言語接触の観点からトゥヴァ語内で独自に生産される「モンゴル語化」の現象は興味深い．Tuv.čuurga《卵》(= AT.yumurqa) に対して Tuv.čuurga**na**《卵》，Tuv.xokpa《馬の尻》に対して Tuv.xokpa**lday**《馬の尻》，Tuv.bašta=《指導する》+ =lga → baš**talga**《指導》，Tuv.kïl=《作る》+ =(ï)mal → kïl**ïmal**《製品》といった例の太字の部分に見るように，チュルク系語彙にモンゴル系接尾辞が独自に生産性をもって付加されている．このことは逆に，モンゴル語でもチュルク語との接触によってチュルク語化が独自に進行したであろうことを思い起こさせる．AT.aγuz ~ oγuz《初乳》: Mo.uγuraγ (yypar)《初乳》，AT.ala《斑の》: Mo.alaγ《斑の》，AT.qut《魂；幸福》: Mo.qutuγ《幸福》などにみる，モンゴル語形に付加された語末の -γ は，正にこの，完全チュルキズム期にモンゴル語内部で独自に進行したチュルキズムによって付加されたものと考えられる．モンゴル語とチュルク語の類似性発展の一要因に，語彙借用以外に，借用した形態素による独自の再生産があったことが理解できる．

第 1 部の 4 では，これまであまり知られてこなかった Trk. /*γ / ~ /*g / : Mo. /*ǰ / のような，モンゴル・チュルク共通語彙の若干に平行して見られる小規模な音現象について述べた．

第 1 部の 5 では，チュルク語音韻の発展史を，モンゴル語・チュルク語間に見られる複数の規則的な音対応語をもとに，モンゴル語学の側から提案したものである．チュルク語学で行なわれてきた旧来の y- チュルク語を全てのチュルク諸語の発展の根幹に据えるような考え方とは全く逆の視点に立ったチュルク語音韻史観を提示している．

第 2 部は，主に第 1 部で論じた借用語判別の考え方に基づいて，1100 あまりのチュルク系（及び

チュルク語を介したと考えられる第3言語由来の）語根を含む語彙を取り上げ，考察を行なった．

第3部は，第2部の考察を主な根拠に，C. Bawden の辞書からチュルク系借用語彙またはその語根を含むものを抽出した結果を掲載したものである．ただその内訳はより細かく，モンゴル語におけるチュルク系借用語の，他の系統の借用語彙との数量的な面からの位置付けをも明確にすべく，1. モンゴル固有語（及び来源不確定語），2. 満州語，3. サンスクリット語，4. チベット語，5. 漢語，6. ロシア語，7. チュルク語，8. その他という具合に，8つの系統に分けて分析した結果を提示した．

第4部は，第1部～第3部の考察のまとめである．特に第3部の 1. ～ 8. の語彙系統の分類の結果を集計し示している．その集計によると，1. ～ 8. のそれぞれに判別される，モンゴル語ではそれ以上分析できないような1つの語根を含むと考えられる語の数とその割合は，1. モンゴル固有語（及び来源不確定語）；4204（61.33%），2. 満州語；40（0.58%），3. サンスクリット語；160（2.33%），4. チベット語；426（6.21%），5. 漢語；436（6.36%），6. ロシア語；630（9.19%），7. チュルク語；889（12.97%），8. その他；70（1.02%）ともとまった．以上の結果，モンゴル語における他言語由来の語彙（～語根）の系統で，最も多いのは 12.97% を占めるチュルク系のものであることが明らかとなる．また，仮にチュルク系以外の借用語（根）をすべて除いても，チュルク系借用語彙の占める，モンゴル固有語（及び来源不確定語）に対する割合は 17.46% 止まりであった．以上のことから，モンゴル語におけるチュルク系借用語彙は，C. Bawden の *Mongolian-English Dictionary* 掲載の現代モンゴル語に関する限り，N. Poppe が *Introduction to Altaic Linguistics* で述べた，モンゴル語語彙の 25% ほどはチュルク系借用語であろう，との発言にみる割合には到底及ばず，せいぜい十数パーセントを占める過ぎないことが，本稿の一連の考察で導き出された結論である．

論文審査の結果の要旨

本論文は、モンゴル語とチュルク語の関係を言語接触の観点から考察し、論者が既に提示したチュルク語由来の語彙分類の幾つかの方法そして本論文で新たに加えた若干の観点より歴史過程の中で為された借用の状況と両語族の言語的類似性の発展の問題を明らかにしようとした意欲的な大部の労作である。

本論文は、

第1部　1.モンゴル語学におけるチュルク系借用語の現状
　　2.借用語彙判別に当っての本稿の考え方
　　3.トゥヴァ語に見られるモンゴル語との共通語彙
　　4.モンゴル語内で見られる若干の音韻現象について

第2部　1.モンゴル語内のチュルク系借用語彙分析
　　2.借用語彙分析の語彙索引

第3部　1.モンゴル固有語(及び来源不確定語)
　　2.満州語系借用語
　　3.サンスクリット語系借用語
　　4.チベット語系借用語
　　5.漢語系借用語

6.ロシア語系借用語
7.チュルク語系借用語
8.その他の借用語
第4部　まとめ及び参考文献
から構成される。

本論文の狙いは、モンゴル語におけるチュルク系借用語という「チュルク語化現象」を解明することである。チュルク系のトゥヴァ語に借用されたモンゴル語語彙を通して検証される「モンゴル語化現象」を先の「チュルク語化現象」へと逆照射しようとする着眼点は独創的であり、説得力がある。従来唱えられてきたモンゴル語・チュルク語の「同系説」(「アルタイ語説」Altaic theory)に異議を唱え、語頭子音のみならず語中・語末子音の音韻対応をも視野に入れた独自の仮説を提示している点は注目される。現代モンゴル語の資料体として利用した C.Bawden の辞書 *Mongolian-English Dictionary*, 1997(語根保有語彙数 6855)より論者は 889 語のチュルク語系借用語を選別し、その一語一語に対してカザフ語、トゥヴァ語のみならず可能な限りのチュルク語、関連諸語及び再構形を提示し周到な検証を行っている。その作業は極めて忍耐力を要するものであり、記述内容は量的に膨大なものとなり、質的にも説得力に富んでおり大いに評価できる。

アルタイ言語学の泰斗 N.Poppe の言説「モンゴル語彙の 25%程度はチュルク語由来であるといっても過言ではなかろう」(1965)に対して、論者がモンゴル語内の借用語彙を隈なく調査した結果その比率を 12.97%と修正したことは、この分野において一石を投じたものであり本論文の成果の一つとして高く評価されよう。

本論文に対して審査委員の中から問題点として次のような指摘があった。音韻体系の違いの問題は、言語の系統関係の問題とは切り離して考えるべきである。「共通語彙」が接触によるものか発生的なものなのかについて議論が十分には為されていない。歴史上カザフ族が登場するのは 15 世紀半ばであり、早期にモンゴルがカザフと接触したという証拠がない。サンスクリット語や漢語からの借用語の記述には粗いところがある等。

以上のような問題点の指摘はあるものの、従来アルタイ語説に反論を唱える G.Doerfer, A.M.Ščerbak などの方法論より進展している。チュルク語からモンゴル語への借用とする数多くの諸例を明示し分析し検証している。本論文はアルタイ語説をめぐる問題に一定の方向性を示したものと評価できる。論者の提示した方法論には独創性が認められ今後この種の研究の一つのモデルとなり得るものであり高く評価できる。

以上の諸点から本論文が博士(言語文化学)の学位にふさわしいものである点で、審査委員全員の意見の一致を見た。